

米紙クリスチャン・サイエンス・モニターの編集方針に見る創刊者メアリー・ベーカー・エディ夫人の思想

小 田 玲 子

How the Editorial Policies of *The Christian Science Monitor* Reflected the Philosophy of Mary Baker Eddy

ODA Reiko

はじめに

本稿は、日本のジャーナリズム研究のなかでは従来必ずしも十分な検討がなされてきたとは言いがたい、米紙「The Christian Science Monitor (クリスチャン・サイエンス・モニター)」(以下、モニター紙と略記する)について、100年以上前の創刊当時、クリスチャン・サイエンス(キリスト教科学。以下は、「クリスチャン・サイエンス」と統一して呼称する)の発見者でクリスチャン・サイエンス教会(第一科学者キリスト教会。マサチューセッツ州ボストン市所在)の創始者でもあるメアリー・ベーカー・エディ夫人(1821-1910)の思想がいかに反映されたかの性格づけを試みるものである。

かつて、ド・トクビルがアメリカをくまなく歩いて結論づけたように、アメリカは、州から市そして村へとすすむほど、地方自治の力が強い。多少俗説ではあるが、筆者は、アメリカには日本のような全国紙は存在しないと理解していた。そして1990年代の中ごろ、全国紙としての性格の強いモニター紙と出合った⁽¹⁾。この日刊紙は教会の組織が発刊する媒体であるが、全国紙として、新聞関係者の間では高く評価されていた。この新聞がメアリー・ベーカー・エディという女性によって1908年に創刊されたこと、そして、エディ夫人はアメリカ史の中では宗教家として歴史に名を残しているにもかかわらず、新聞人としての側面はあまり知られていないなどの理由で、この女性の生き方に関心を持った。

この新聞が当初から国際報道を柱の一つとしていたことや、新聞としては前代未聞の「国家の癒し」という概念を抱いて編集方針を策定したこと、さらには、これも新聞としては前代未聞であるが、酒、たばこ、医薬品などの広告は社の方針として禁止したことなどを知っ

た。エディ夫人の evil (悪) や greed (貪欲さ) を決して許さないという、良い意味での闘争的な思想⁽²⁾ が、そのままモニター紙の基底部分として貫かれていると考えるに至った。

もちろん、モニター紙とそれに反映しているエディ夫人の思想は、greed などのみを扱うわけではない。greed に対して闘争する宗教であり新聞であるとの面だけが強調されるべきでもない。しかし、筆者は、greed などを取り除く、拭い去ることの任務・使命が日本のジャーナリズムに欠落していることを指摘することが必要であると考えたため、本稿では、あえてこの面のみに注目したい。クリスチャン・サイエンス教会の創立者メアリー・ペーカー・エディ夫人の思想がいかにして新聞の編集方針として結実していたのかを、三つの視点で分析する。

- (1) ものごとの表面と本質の違い。
- (2) 人間は greed に対して脆弱であり、チェックされない脆弱さは人間を高めはしない、という視点。
- (3) 「考え方が変わる」というクリスチャン・サイエンスの信仰の本質を、人々に日々届く新聞の“触媒力”に託すということ。

エディ夫人の宗教家としての歩みが傑出している半面、そのジャーナリズムへの貢献は明らかにされていない。その理由としては、少なくとも次の二点がある。

- ① エディ夫人が創刊したモニター紙の編集方針が当時のアメリカの新聞ジャーナリズムの水準からするとあまりに理想主義的であり、しかも国際色を打ち出したこと。
- ② 宗教色を出してはいないものの、それぞれの記事は社会が良い方向に向かうための方策を示すという、モニター紙による「癒し (healing)」を全面に出し、同時に、「癒し」を喚起する熟練した能力を記者たちに求めたこと。

これらの点で、異例づくめの船出だった。このような特殊な要素のため、この新聞そのものがジャーナリズム研究者にはなじみにくい面があったのではなかろうか。特に、報道と「癒し」の関係は、ジャーナリズム史において開かずの扉である。

創刊時、エディ夫人は、モニター紙の目的を、「いかなる人も傷つけない、全人類を祝福する (to injure no man, but to bless all mankind)」⁽³⁾ とした。モニター紙の編集長を務めた後、コラムを書き続けているジョン・ヒューズ (John Hughes) は、筆者の見るところ greed critic の代表格である。ヒューズの書くものはどれも、人間の貪欲さについて容赦なくえぐり出す。ヒューズは、定期的なコラムとしては最後になる 2012 年 4 月 30 日付けのコラムで、このモニター紙の目的の意味を次のように提示している。

「“to injure no man, but to bless all mankind” とは、世界をバラ色のメガネで見ることではない。evil があるところ、モニター紙はそれを報道する。しかし、モニター紙は、絶望よりも解決に、そして癒し (healing) に専心するのである。」⁽⁴⁾

「evilやgreedを明るみに出し、癒しへと方向づける」ジャーナリズムが連綿と受け継がれてきているのである。このような癒しのジャーナリズムの灯をともしたエディ夫人の思想を探っていきたい。

1. 「癒し」のジャーナリズムの夜明け

1-1 クリスチャン・サイエンスへのプロパガンダ

エディ夫人は幼少のころから病弱であり、その後はそのまま長い信仰の探究のプロセスであった。46歳のときに遭った重傷事故を機に1866年、聖書のイエスの癒しの話を読んでいるうちに「神は唯一の生命」と自覚すると同時に完全に治癒している。それが、「クリスチャン・サイエンスの発見」である。

そして、ここを境にその後の17年間、それまでの、どちらかという個人を対象とした癒しの実践にとどまることなく、社会、国家がその抱える問題をじっくりと分析する、という当時の日刊紙の常識を超えた水準の「新聞による癒し」の発想が熟成されていったのではない。

1800年代後半のアメリカの日刊新聞には、二つの特徴があった。一つは、いわゆるセンセーショナリズムを売り物にしていた点である。もう一つは、当時の地方新聞は政党色が強かったことである。読者層も、圧倒的に男性であった。

このようななかで、女性が日刊紙の創刊を構想するということは、何を意味していたのか。エディ夫人の強い思いは、特に、当時の新聞ジャーナリズムが「病氣」というものに対してプロパガンダ的な姿勢を強めていたことから始まったのではないかと、その見方を、後のモニター紙第4代編集長のアーウィン・キャナム（Erwin D. Canham）は示している⁽⁵⁾。「クリスチャン・サイエンスの発見」以降、エディ夫人は、さまざまな悪意ある中傷にさらされていた。その中傷の種類は、大きく分けると次の三点くらいになる⁽⁶⁾。

類型1：精神的な原因ではない病氣（えそのような病氣）に霊的な治癒を求めようとする
ことへの非難。

類型2：即座の治癒が起こらなかったこと、または病状が悪化したかのように見える事例
への非難。

類型3：重篤で、しかも緊急外来的な症例にも祈りによる治癒を求めることへの非難。

そして、現代版の中傷は、テレビの有名番組フィル・ドナヒューショウ（トーク・ショーの一種）での出演者たちによるクリスチャン・サイエンス教会への攻撃⁽⁷⁾をはじめ、数知れない。100年前に新聞によって中傷されたほぼ同じ内容の中傷が、現代でも行われたのである。

この一事をとってみても、中傷というものは、本来的にプロパガンダの形態をとりやすいことが明確である。100年前の新聞報道のなかに見るプロパガンダと現代のテレビ番組を介したプロパガンダには、共通点がある。大衆メディアは、グラフィックな訴求力を使うという事実である。この場合、メディアは「病気というものは実在し、圧倒的な力で人々を苦しめる」という見方・信念に基づいて、治癒の「即座性」、劇的な治癒を描こうとするのである。

クリスチャン・サイエンスの体系において、「即座性」は本質なのではない。しかし、グラフィックな表現攻撃をしかけるプロパガンダは、常套手段としてそのあたりを突いてくる。

1-2 触媒ジャーナリズムという代案

エディ夫人は、「人は物質的な存在ではない」という理解に到達している。クリスチャン・サイエンスでは、「人間」と「人」とを別のものとする。この区別については、一般の人々にとって難解であるので、本稿では立ち入らない。

一般的に、人間のなかで静かに起こる大きな変化は、外から見たのではわからない。私たちは、その人の「理解」の形成のしかたを現象として見ることはできない。よって、大衆メディアは人の心のなかの考え方の形成過程に寄与するには不向きなのであろうか。こともあろうに、プロパガンダは人間の「理解」とは正反対の感情面での波立ちを誘ってくる。

プロパガンダが激化したころの1883年には、クリスチャン・サイエンティストによる新聞を発行する構想が表明されている⁽⁸⁾。エディ夫人は、グラフィックな攻撃に対して、グラフィックな言葉で応じるというメディア界の方法を選ぶはずはない。発刊を決意するまでの道のりを支えたものは、ささくれ立ったプロパガンダへの対抗ではない。

エディ夫人自身は、フランスの学者パスツールが細菌と病気の関連を明らかにし、さらにフレーデリック・メイシュナーによるDNAの発見により「生命」は物質の集合体のようなものとして学術的に示された時期に、非常な頻度で、そのような学術的見解を「人間の諸感覚によって戯画化された見方であり、それは真実の人間の姿ではない」⁽⁹⁾と指摘している。細菌学者と生物学者の説をプロパガンダと評することはできない。しかし、エディ夫人の心のなかでは、それらも同様のものであろう。「人は物質的な存在ではない」という自らの思想の中核とは真正面から対立する。

日刊紙の発行の決意までには、このような学術の装いをまとった生命観（DNAなど）への警戒もあったのではないかと推測される。たとえ、いかに学術的に仕立てられていようが、人間存在を細菌や核酸のレベルに帰することは、エディ夫人にとって、自らの生涯を否定するに等しいことなのであろう。

エディ夫人の伝記を書いたロバート・ピールが、エディ夫人自身が使った用語ではないが、感覚的にとらえることができるレベルのことを「戯画」(caricature)と評しているのは、ゆえなしとは言えない⁽¹⁰⁾。エディ夫人は、「人の生命は神に由来するものである」と考える。1800年代後半に欧米の学術界に広まった、人間存在を物質視する風潮を目の当たりにして、

エディ夫人のなかに「そうではない！」という思いが醸成されていったと思われる。

こうして、1883年の発刊の決意から1908年に創刊となるまでの25年間が経過する。「物質には生命も知性もない」⁽¹¹⁾が、クリスチャン・サイエンスの基本である。「心と生命の無限性」が強調される。人間存在を物質に帰することが学術的にこれからますます進むであろうことを予見していたエディ夫人は、ある方針を固めたのではないだろうか。

少数の読者を念頭に置いていたであろう。方針として、エディ夫人が新聞事業を行うにあたっての助言者と見なしていたボストンの新聞人ジョン・L. ライト (John L. Wright) の書簡 (1908年3月12日付け) から、次のような考え方が要約できる⁽¹²⁾。

- ① 犯罪報道をしない。社会に有益な事柄を示す。
- ② ほどほどの数の読者でよい。
- ③ 新聞としての利潤よりも、方針を優先する。
- ④ 悪に対しては、譲歩しない。

1908年の時点では、モニター紙を特徴づける「綿密な背景分析」「底流の明示」「広角な描写」「意味の分析」などは、示されていない。しかし、上記①のように、犯罪報道を捨てるという立場への言及はある。

ライトの同日付の書簡文に「知るに値すること (things really worth knowing) に注意を向ける」という一文がある。モニター紙は後に、「知るに値すること」の選択と提示の仕方において独自の地位を築くことになる。モニター紙が「知るに値すること」を毎日示すことで、エディ夫人は、「人々の“スタンダード”を上げる」ことを意図していた⁽¹³⁾。

「知るに値すること」を伝えるには、綿密な「背景分析」と「意味の分析・解釈」が伴う。「事象の背景と底流」とは、ものごとの上からの見方と下からの見方を融合し、さらに平面上では広角レンズで見ることも含む。その事象の動きを全体としてとらえるアプローチは、日刊の新聞としては不向きと見なされるかもしれない。そのようなことは、月刊誌に任せればよいのではないか、と思われるかもしれない。背景や底流はゆっくりと進むので、日々の即時性が勝負の日刊紙の世界では、不向きどころか新聞への世間的評価を減じることにものなりかねない危険性を擁している。

事象を上から下から、さらに広角に見るというアプローチが一般の読者に受け入れられるには、時間がかかる。モニター紙は、創刊から20年ほど経った1930年代、1940年代には、すでに全米で4500もの中小の地方新聞社が講読するまでになる⁽¹⁴⁾。それらの多くは、モニター紙の、まさに、背景・底流・広角レンズ的アプローチのなかに、地方新聞としての活路を見出したのではないか。モニター紙が、新聞が本来担う「速報性」をあえて捨てていると言うと、語弊があるかもしれない。「重要度」に関して、他の日刊紙とは異なる基準を持っているといったほうがよいであろうか。いわゆる「速報性」の対極にある「背景分析」で知られるようになっていき、その「背景分析」の数々が、何年経っても参照に値する質の高さ

を持つようになるのである⁽¹⁵⁾。

そのような評価の定着の源流は、エディ夫人による人々の“スタンダード”を上げよう、心の地平線を上げようとする挑戦から始まっているのである。

2. greedや「汚れ」をえぐり出す

2-1 表面か本質か

100年にわたって、一貫した編集方針を保持することがいかにして可能であったのか。一例として、創刊当時からあった国際性についてであるが、エディ夫人はすでに1880年代において、インドと中国の将来を懸念している。100年以上経った現在、この新聞のインドおよび中国関連の報道頻度は日本の一般紙の比ではない。頻度のみならず、その報道姿勢がきわめてユニークなのである。それは、ちょうどエディ夫人が懸念したように、ある国が形成期の脆弱さを脱して成長するためには何が必要かを分析し、方策を提示するという姿勢が現在も健在であることが確認できる。

例えば、新聞のフォーマットが変わって以降のインド特集の一つ、2011年2月11日号“Trendy Thread From Waste”においては、綿織物産業における付加価値の高い製品、水の節約技術、雇用の創出などについて、まさに地を這うように取材されている。この綿密さがこの新聞の持ち味であることを、ジャーナリズムの専門家は知っているかもしれないが、この方針がエディ夫人の思想にまでさかのぼるとなると、ジャーナリズムの研究ではなく哲学史の分野である。このような特殊な事情が、日本においてこの稀有な新聞の研究を遅らせてきた原因の一つであると筆者は考える。

この新聞が世界的に評価されるに至る直接のきっかけは、第4代編集長キャナムによると、1930年代のインドについての報道であった。伝説の記者C.K.カミングズは当時の特派員の常識を破って、自分の眼と耳で現実を把握するため、地を這うようにして市井の人々の声を丁寧に拾った。このような姿勢を、キャナムはことのほか重視した。キャナムは、後に、ジョン・ヒューズをアジア問題の専門に任用する際に、次のような助言を与えている。His mission is to get beneath the surface of popular movements in order to show the trends of the future. (彼の任務は大衆レベルの動きの底流を観ることで、将来の傾向を読み取ることである。⁽¹⁶⁾)「ものごとの表面を見るな。ゆっくりした動きを見よ」ということなのである。

このような、ものごとの表面ではなく本質を見ることができるジャーナリストは、簡単には育たない。この新聞を分析するとき不可欠な視点は、記者の養成に多大な時間をかけるという点である。再度、キャナムの言葉を引用すると、モニター紙は「記事が書かれた日から何年経っても価値が減じないような内容にするため、記事に背景と分析を加える」⁽¹⁷⁾。つまり、記者に、ものごとの表面を見ない訓練を課す。

1970年代の編集長であったジョン・ヒューズは、前出の2012年4月30日付けの最終回のコラムにおいて、次の三つをモニター紙の編集方針と見なしている。

- (1) 記録をとる chronicle
- (2) 解釈する interpret
- (3) 吟味する appraise

これらは、新聞界の常識では、速報性を追求する日刊紙の記者に求められる資質とは言いがたいであろう。

では、なぜ、この新聞は時間のかかる分析記事を書ける資質を記者に求めたのか。この問いに答えるために、モニター紙の編集方針と正反対な方針がどのようなものであるかを凝視してみたい。次の文章は、現在の編集長ジョン・イエマ (John Yemma) が書いた「現代ジャーナリズムにおける有名人志向の虚偽」(The modern-day myth of fame) の一節である⁽¹⁸⁾。

「最近、ある読者は、本紙が有名人のニュースをほとんど扱わない方針 (low celebrity factor) を賞賛してくれた。(新聞に) 有名人を出さないことは良いことだと思う。本紙の方針はアメリカに昔からある『誰がではなく、何を』の原則、悪事ではなく善行を、(有名人の) 人柄についての詮索ではなく達成事項を、ふわふわした見せかけだけの華麗さやスキャンダルではなく、堅実でリアルなニュースと市民の姿を扱うということ (本紙としては) 再確認することになるだろう。」

モニター紙が、このような“きつい”方針をもっていることの背景を考えてみたい。やはり創刊者エディ夫人の考え方にまでさかのぼる必要がある。エディ夫人は、虚偽や嘘の本質は「本来ではないもの」と見なした。それと同時に、虚偽や嘘は、表面、虚飾、熱狂と興奮などの衣をまとって人々の前に姿を現す、と考えていたように思える。

エディ夫人は『科学と健康』⁽¹⁹⁾ のなかで、動物磁気 (animal magnetism) という表現で、このような熱狂状態は、真の人、霊的な人の性質に由来するものではなく、動物的な性質の表出と見なしている。エディ夫人は『母教会の規範』の一節で、教会の信者には、外界の事象に対して「誤って……影響を与えたり、影響を受けたりすることから解放されるために、日々油断なく目覚めていて祈らなければならない」⁽²⁰⁾ と注意を促している。

熱狂状態の最たるものは、プロスポーツの試合やアジテーションを目的とした政治的演説である。さらには、ギャンブルなどが巨額のお金を瞬時に一握りの人に与えるがゆえに、人々は熱狂し、取りつかれたように宝くじ販売所へと走る。次の箇所⁽²¹⁾ は、虚偽と嘘が現実的にどのような形で表出するかについて考えるヒントを与えてくれる。

「(スポーツや芸能で) 名声を得ることは、懸命に働くことで人生と職業を築こうとせず、一攫千金をねらって宝くじを買うことに似ている。」

この論調は、まさにモニター紙の独壇場である。1970年代から1980年代にかけて、ジョン・ヒューズ編集長の時代に集中的に書かれた多くの論説群は、ギャンブルとそれに近い一攫千金文化の危険さを指摘した。ギャンブルは中毒であり、一攫千金自体が目的化する。何かが目的化する状態では、「意味」はすでに喪失している。

エディ夫人はモニター紙創刊によって、ジャーナリズムをとおして、人々が「意味」を深く考えること、深い思考のためのある種の触媒となることを信じた。モニター紙という新聞が、毎日毎日深い分析を人々に示すことで、人々の思考を発酵する“パン種”（触媒）になり続けると信じていたのである⁽²²⁾。

2-2 チェックされないgreedは人間を高めはしない

エディ夫人のクリスチャン・サイエンスは、「悪」(evil) という語の解釈において従来のキリスト教の考え方とはかなり異なる。夫人は『科学と健康』のなかで、繰り返し「悪」または「罪」は、本来、人に備わっているものではないと述べている。「悪」(evil) を「虚偽」「嘘」の同義語として使っている。

「虚偽」は表面に現れる。「嘘」はまことしやかに語られる。要するに、「虚偽」と「嘘」は表面的な現象なのである。エディ夫人は、ものごとの表面を見ることを続ける以上は、虚偽と嘘の束縛から放たれることはないという考え方を持っていたのではなかろうか。実際、『科学と健康』の中では、かなり強烈な言語表現によって、「人の本質は物質ではない」と強調されている。「人＝物質」観は「嘘」であると断じている。

夫人のこの強烈な峻別規範は、いったい何に起因するのか。「はじめに」で前述したように、46歳ころの大病ではっきりと「クリスチャン・サイエンス」をつかむまでの探究のプロセスでの神との対話のなかで形成された思想に起因するのである。46歳ころの事故と「クリスチャン・サイエンス」の発見は、エディ夫人をして『科学と健康』の改訂に次ぐ改訂の長い執筆活動に邁進させた。同書では、人間の心を科学的に訳して、段階を三段階に分け、「人＝物質」観がなくなっていく、清められる段階までを示している。以下は、同日本語テキストの正式訳である⁽²³⁾。

第一段階：墮落。

肉体的。悪の信念・激情と肉の欲望・恐怖・墮落した意志・非實在・自己弁護・誇り・うらやみ・欺き・憎しみ・復しゅう・罪・病氣・病・死。

第二段階：悪の信念は消えゆく。

道德的。人類愛・正直・愛情・慈悲・希望・信仰・温順・自制。

第三段階：理解。

靈的。知恵・純粹・靈的理解・靈的力・愛・健康・靈的清さ。

第三段階では、人間の心は消え、人が神の映像として現れる。

このように、エディ夫人は、「悪」は具体的な現象としては貪欲さ (greed)、嫉妬 (envy)、憎しみ (hatred)、虚栄 (vanity) などの形をとると考えていた。これらの特質は、実は現代の新聞、週刊誌、テレビが拠って立つ低い水準である。モニター紙は日刊紙の体裁をとりながらも、人間の本質的な弱点、貪欲、不自由な見方などへの良心的な警鐘を示す新聞ということになり、これは、新聞の歴史では未踏の分野であった。このように見るとき、エディ夫人の先見性が際立つ。

モニター紙は、酒、タバコ企業からの広告収入を禁止するという、ある意味で当時の日刊紙の常識を破る試みを行った。すなわち、酒、たばこ、医薬品（後に、化粧品も）などは、人間の物質への依存心を示すものであり、これらの広告を出すことはこの新聞のポリシーを否定することにつながる。おそらく、男性には思いもよらぬ発想であろう。

後に、このことが、アメリカ社会の様々な社会問題を俎上にのせ、分析し、責任ある方策を提示する、というモニター紙の性格を形成する。第4代編集長アーウィン・キャナムは、「モニター紙にとって、酒、たばこ、医薬品の広告を載せないという規律なしには、今の名声はあり得なかった (without them (indispensable elements) the prestige never would have existed)」⁽²⁴⁾ と述べている。

モニター紙の性格づけをする際、キャナムが述べているように、次の四点に集約される。

- (1) 背景 background
- (2) 深さ depth
- (3) 展望 perspectives
- (4) 意味 meaning

キャナムによると、エディ夫人はすでに1908年当時に、新聞報道というものには取材対象の「意味」を分析する必要があると指摘していたと思われる節がある。greedや「汚れ」は、チェックされるべきであり、その方法は、上記の四つの要素の徹底というものであったのである。

3. 新聞ジャーナリズムによる「healing」へ

3-1 「考え方が変わる」ということ

生来、ものごとの本質を時間をかけて考え抜く傾向の強かったエディ夫人は、当時のアメリカの新聞ジャーナリズムの質の低さに対して、まったく新しい代案を提示したように思える。その代案たるや、後に世界中の新聞人から高い評価を得ることになる。

エディ夫人のそのような先見性は、いったい何に起因するのか。エディ夫人は、モニター紙が“人々への最も温和な説得者”と評されたことにとっても喜んだと伝えられている⁽²⁵⁾。

エディ夫人は、モニター紙を、クリスチャン・サイエンティストが行う「癒し」の次なる

仕事と考えていた。筆者は、エディ夫人が考える「healing」の概念が、当時の一般的な概念とは著しく異なっていたのではないかと推察する。「healing」は単なるものの見方の変化ではない。夫人が考える「healing」は、前節で見てきた、人間のとらわれやすい「汚れ」の実態を明らかにすることと不可分なのである。

前述のように、エディ夫人は1883年の時点ですでにクリスチャン・サイエンティストによる新聞の必要性を考えていた。刊行する新聞には、世にある新聞という新聞が人々に病氣や危険なことなど不快なことで埋め尽くすことに抗して、各家庭に「癒し、つまり、考えをきれいにすること (healing, purifying thought)」⁽²⁶⁾ を届けるという「healing」の意味を持たせていることがわかる。

「healing」は、「清めること」に近いのではないか。「モニター紙は、癒しの仕事、つまり、日々のニュースに取り上げられ、たくさんの問題を起こさせる原因となっている、自分のなかに、そして他者のなかにある greed や恐れ、そのほかの良くない現象を読者が乗り越えることができるための一助になるようにデザインされる。」⁽²⁷⁾ とも述べられている。モニター紙による「healing」は、「greed や恐れなどを乗り越える」という意味なのである。

しかし、新聞ジャーナリズムにとって、当時は、そして今日も、「汚れ」を定義することは難しい。まして、「きれになる」ことを新聞の紙面で行うとしたら、少なくとも当時の世相では、それは日刊新聞というよりは、宗教団体に附属する機関誌の道を歩むことを意味したであろう。エディ夫人は、この新聞の性格については、25年くらいの時間をかけて考え抜いている。この25年間の葛藤のなかから、新聞報道を介した「healing」についての明確なポリシーがエディ夫人の心のなかに形成されたと見てもさしつかえなからう。

エディ夫人は、おそらく「healing」の本質は貪欲さ、恐怖心、人間に対する制約的な見方から自由になることと考えていたのではないか。エディ夫人の「healing」観には、当初から、今日のモニター紙の特質として新聞人の多くが認める点があったのではないか。「healing」の概念は深淵であり、とても、一本の論文で論じつくせない。そこで、簡略化のために、あえて、対応図をつくってみる。

| 人間の陥りやすい状態 | モニター紙の「healing」 |
|--------------------|--------------------------------------|
| 貪欲さ | → 物質への依存から自由になる。 他者のためになることを模索する。 |
| 依存的な生き方 | → 自分の価値を自分で形成する。 |
| 人間や社会、世界に対する制約的な見方 | → 「考え方」が変わること。 視野の広がり。本当の自由。 |

筆者は、「healing」とは上表の左側のものから自由になることであると夫人は考えていたように思える。資料的な裏づけは難しいが、夫人の著作物には一貫して出てくる価値観である。

依存的な生き方は、人間の弱点として広範に見られる状態である。さまざまな種類の依存症は、学校でも職場でも普通に見られる。特に近年、10代の女性たちの「やせていること」への過度のイメージ依存の結果、さまざまな依存症が問題化している。モニター紙は、おそらくアメリカの主要新聞ではこの問題を継続的に指摘してきた唯一の新聞である。子どもを儲けの対象にするおとなの芸能文化、化粧品業界、ファッション業界等を greed として明るみに出してきた。

過食症などの摂食問題の根っこは、実は、人間の弱点に深く巣食う「依存的」な姿勢である。この問題は深刻な社会問題であるにもかかわらず、新聞やテレビは指摘しない。指摘したとしても、広告を出している企業への遠慮から本質は書けない。日本の新聞・テレビはビール業界の広告で成り立っているのです、そもそも、アルコール依存の実態を摘出することはありえない。モニター紙はこれまで、アメリカにおけるプロ野球選手が普通の人の何百倍の年収を得ていることを、論説や cartoon で指摘してきた。真剣に働いている人たちがわずかな収入しかなく、プロスポーツとはいえ、たかが遊びで巨額の収入を得る人たちのことをこれほどはっきり書く新聞はない。

依存症の最たる現象は、言うまでもなくギャンブルである。アメリカの場合、そして、日本も、地方自治体のなかには、公営ギャンブルによって財政が潤っているところもあるので、前述のビール業界や化粧品業界ファッション業界と同様、新聞とテレビはこの分野には踏み込めない。おそらく、公平な報道ができる唯一の新聞がモニター紙である。この新聞の熟練した記者たちは、地域の経済を分析する際も、この視点を忘れない。一例として、1997年6月2日付けの一面記事 Small Economies Ride High (Ron Scherer 記者) は、表立って、ギャンブルを誘致することがもたらすことと、それへの代案として地元の小さな産業・雇用を選択することとを対比して見せる。

「(6年前)失業率は14パーセントであったその地域は、繊維工場は閉鎖されており、漁業は干からびていた。地元当局は、最後の経済的な突破口をカジノに求めた。(中略)カジノではなく伝統産業のクジラ漁業によって、地域の歴史的な地区に新しい公園をつくり、観光客を引きつけることができる。」

ギャンブル収入をどの自治体も望むが、それは依存症の現象に支えられていることを摘出するとすると、記者に力量が求められる。依存した心からは工夫は生じない。同じ地点をぐるぐる回るだけの生き方は人間的と言えるか。

さて、エディ夫人が「癒し」をこのような依存的な生き方や、同じ地点を回るような工夫のない生き方が消えることとして把握していたという筆者の仮説をもう一步すすめると、エディ夫人研究の第一人者ロバート・ピール (Robert Peel) による「学術的研究が結論づけたように、クリスチャン・サイエンスの思想的なユニークさは、歴史上で初めて、実践的な形而上学 (practical metaphysics) として登場したことにある」⁽²⁸⁾ に注目しなければならない。しかし、このことは、より広い研究領域を知らなければならないので、後の研究課題と

したい。

エディ夫人の考えは思弁的ではなく、具体例に支えられた独特の「形而上学」であったと仮定すると、後のモニター紙が、人間の心に巢食う食欲さや依存症を思弁的に扱わず、きわめて現実的、具体的に扱ったということと同一線上に見ることができないだろうか。エディ夫人が見込んだジャーナリストの資質は、次の三要素であったという。①seasoned（いろいろなことを経験してわかっている人）②substantial（中身のある人）③practical（現実的な人）⁽²⁹⁾。このようなエディ夫人のジャーナリスト像も、深くて広い見方と具体的な見方を重視したことがわかる。metaphysical healing⁽³⁰⁾ という言い方もしているが、「healing」という思弁的なテーマに具体性と現実性を与えたことが、エディ夫人の新聞人としての傑出した資質を物語る。

3-2 モニター紙の「癒し」の実際

モニター紙のいう「癒し」と「良い方向の提示」のわかりやすい実例として、新聞の報道対象になりにくいと思われる農林水産業に関する記事群がある。農林水産業の対象たる土、水、樹木、海などは、成育に数十年、数百年の視野を要するため、どうしてもマスコミの対象にはなりにくい。しかし、一方で、農林水産業の行政のあり方は、数十年の視野で関心を維持していかなければ、そのゆっくりとした変貌はついに地元の人々に知覚されることはない。やがて、それは深い傷となって、地元の人々を苦しめることになりかねない。

「癒し」は人の身体的、心的な状態についてのみ生じるのではなく、さまざまな社会的事象についても生じるという前提に立ってみる。実際、この前提は、エディ夫人が深く信じていたことの一つである。すでに触れたように、エディ夫人の「癒し」の本質は、ものの見方の根本的な変換にある。「人を物質視すると、物質に束縛されて不自由が生じる」と考える。「人=物質」観をつきやぶるならば、新しい地平が拓けてくる。

モニター紙の「癒し」を差し出す農林水産業関係の専門記者には、ラッシュワース・キダー、ブラッド・ニッカボッカなど多くが育っている。歴史的転換となるような事例を、敏感に取り上げてきた。以下の例も、そのような多くの事例のうちの一つである。

California Town Unites To Save a Local Stream, 1991年2月28日付け

（要旨）カリフォルニア州のウルフ・クリークは、両側の地域で無計画な放牧、伐採、道路建設が行われたことによって、かつての清流は悪臭を放つどぶ川へと変貌した。地元の産業界総出で始まったプロジェクトは、河川上流の森林と河川流域の補修工事によって、以前より広範な収入ベースを確保する試みである。溪流釣りや民宿業の再生、地域の水道局との連携による飲料水の質向上プロジェクトによって、この町の下流地域にある水道局からきれいな水を提供できるサービスに対して上流にある農家に収入をもたらす。このようにして、この小さな町は、森林と河川の修復が町の経済的安定をもたらすことを証明したのだ。

モニター紙の生態系補修に関する記事群は、どれも、単に生態系が修復されるのではなく、生態系修復が地元収入をもたらしたり、有機農業の実践を可能にしたりするような修復の仕方の良い方向への提示が必ずある。この分野に限らず、モニター紙の認める「歴史的な転換」とは、問題をめぐって有機的な複雑性をもって良い方向へと歩き出すような地味な地点にこそある。

このような地味な歴史的転換点は、モニター紙の継続取材によって見出される。いずれの記事においても、「癒し」の要素を現実的な場面に移して考えようとしている。「癒し」は即座に起こることはめったにない。なぜなら、病根は深いかもしれないからだ。モニター紙はこのことを熟知するがゆえに、根が深い病根については①背景分析、②歴史を見る、というブリズムを用意しているように思える。

記者は、問題の周辺のあらゆる利害関係者を集めてくる。そして、これらの関係者たちと、共に、ぎりぎりの妥協点を模索するような分析の方法である。当該の業界に付くこともなく、行政側に付くこともなく、中立の立場で示すことができる力量があって初めて成り立つ。もちろん、どの業界に対しても影響を受けない（そのために、大手企業からの広告出稿は取らないことをポリシーとして守ってきた）からこそできることである。

エディ夫人が示した方針「国家を癒す」は、一般の新聞人にはわかりにくい。具体的に、貧困、雇用問題、農林水産業の衰退、村の過疎化、生態系の悪化、等々の社会問題が世界中のどの国にも存在する。greedが人間社会を根底においてむしばむからには、問題に対して人間（読者）が気づき、共に考え視野を拡げていき、乗り越えるための方途となる「癒し」のジャーナリズムを探究し続けなければならない。

おわりに

なぜ、エディ夫人の思想と実践に魅かれるのか。エディ夫人は小さいころから神の存在をつかんでいたと言われているが、46歳のときに起きた事故から神・キリストが癒すことをはっきりと知った同様の出来事を、筆者の場合は、年齢も同じくして体験したことが大きい。悪（霊）の力は強かったが、その力は、神の愛、生命の真実に勝つことはできなかった。瀕死の状態をさまよったが、人間は魂によって生きているのだということを理解する瞬間が筆者にも訪れた。

エディ夫人はモニター紙に、greedをあぶり出すことによって、浄化する・癒す役割を託した。眼前にgreedの山が目の前に立ちだかったままでは、人々はその先にある「本当のこと」を探究することはできない。モニター紙創刊の1908年11月25日、その日は寒く、霧の深い日であった。エディ夫人はモニター紙のメンバーたちを自宅に招き、外の天気とは正反対に、「今日は、すべての日々のうちで最も明るい日です。今日のこの日から、私たちの

日刊紙が人類を明るくしていくのです」と述べたという⁽³¹⁾。

アメリカにおけるエディ夫人研究100年の蓄積を踏まえるならば、本稿は、到底「研究」の域には達していない。筆者のこれからエディ夫人研究、および、触媒ジャーナリズム研究のスタートとしたい。

注

- (1) 1990年代後半に出現した教育上の概念であるメディア・リテラシーについて、調べてまとめたことがある（拙著『サウンド・バイト：思考と感性が止まるとき』東信堂、2003年）。特に、日本のメディア・リテラシー観が「メディアをいかに賢く利用するか」という見方に傾斜していったところのことである。筆者は、1990年代半ば以降のモニター紙に依拠して問題を追ったため、この新しい教育課題の「意味」を知ることができた。モニター紙は、メディア界が人々に greed や「汚れ」を刷り込む仕組みとして展開されてきた「背景」を、「深さ」と「展望」をもつ多くの記事群でえぐり出してきた。モニター紙が、刺激的コンテンツで人々の視界を埋め尽くそうとしているサウンド・バイト・メディアは「心の公害」であると、ある意味で決めつけたように執拗に指摘するとき、真の「メディア・リテラシー」とは、greed や「汚れ」に人々が気がつくことができ、そのような汚れた、欲まみれの価値観と決別し、自分の価値観を創っていく思考力であるということが見えてくるのである。
- (2) エディ夫人の闘争的な思想は、クリスチャン・サイエンスのテキスト Mary Baker Eddy, *Science and Health with Key to the Scriptures*（メアリー・ベーカー・エディ著『科学と健康—付聖書の鍵』）にも多く表れる。一例では、同書 p.29 の1～2行目に「クリスチャンは、国の内外で、間違った考え方に對して武装して立ち上がる。」とまで書いている。
讃美歌のなかにも、エディ夫人の数多くの詩に曲が付けられているが、「闘争的」と形容できるような作品もある。讃美歌161番のなかに、次のような一節がある。「Aye darkling sense, arise, go hence! Our God is good. False fears are foes – Truth tatters those, When understood.（邪惡の思いは立ち去れ 真理は恐れを破らん）」作曲：1932年、リニューアル1960年。日本語訳1971年。
- (3) 創刊号で、エディ夫人は、教会の出版物 *The Christian Science Journal*, *Christian Science Sentinel*, *Der Herold der Christian Science* と *Monitor* について、書名とその意味づけ、目的を書いている。SOMETHING IN A NAME 「(前略) the next I named *Monitor*, to spread undivided the Science that operates unspent. The object of the Monitor is to injure no man, but to bless all mankind.」MARY BAKER EDDY (My. 353:6-19 [Extract from the leading Editorial in Vol. 1, No. 1, of *The Christian Science Monitor*, November 25, 1908])
- (4) John Hughes “My long love affair with Monitor journalism.” *The Christian Science Monitor Weekly*, April 30, 2012.
- (5) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom: The Story of The Christian Science Monitor*, Houghton Mifflin Company, 1958, p.9.
- (6) 当時のエディ夫人への中傷の詳細は、ロバート・ピールによるエディ夫人の伝記の第2章に詳細に記されている。Robert Peel, *MARY BAKER EDDY: The Years of Discovery*, Holt, Rinehart and Winston, 1966.
- (7) Robert Peel, *Spiritual Healing in a Scientific Age*, Harper & Row, Publishers, pp.103-108.
- (8) *The First Church of Christ, Scientist, and Miscellany*, (Misc.) 4: 12
- (9) Robert Peel, *MARY BAKER EDDY*, p.280.
- (10) 同上
- (11) Mary Baker Eddy, *Science and Health with Key to the Scriptures*（メアリー・ベーカー・エディ著『科学と健康—付聖書の鍵』）p.468.
- (12) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, pp.72-73の間の数ページのグラビアの1つに、直筆の手紙の写真がある。
- (13) Stephen Gottschalk, *Rolling Away The Stone: Mary Baker Eddy's Challenge to Materialism*, Indiana University Press, 2005, p.390.

- (14) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.423.
- (15) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.333.
なお、創刊100周年にあたる2008年の翌2009年に、日刊紙からウェブ版に切り替わっている。同時に、*The Christian Science Monitor Weekly*が紙媒体として発行されている。
- (16) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.369.
- (17) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.333.
- (18) John Yemma, "The modern-day myth of fame." *The Christian Science Monitor Weekly*, December 6, 2009.
- (19) Mary Baker Eddy, *Science and Health with Key to the Scriptures*(メアリー・ベーカー・エディ著『科学と健康—付聖書の鍵』)は、クリスチャン・サイエンスの教科書である。
- (20) 『母教会の規範 (*The Mother Church Manual*)』40頁の第八条「動機と行動の規則」第1項。
- (21) John Yemma, "The modern-day myth of fame."
- (22) Stephen Gottschalk, *Rolling Away the Stone*, p.384. 毎日毎日、モニター紙が家庭に届くことで、徐々に考え方の「発酵」が進むようなニュアンスが、“パン種 (leaven)” に込められていると思われる。“パン種 (leaven)” は、イエス・キリストによる喩えとしてもあらわれている (クリスチャン・サイエンスの教科書『科学と健康—付聖書の鍵』には、107頁に見える)
- (23) Mary Baker Eddy, *Science and Health with Key to the Scriptures*, p.115.
- (24) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.384.
- (25) Stephen Gottschalk, *Rolling Away The Stone*, p.390.
- (26) Mary Baker Eddy, *Miscellaneous Writings*, The First Church of Christ, Scientist, 1896 7:17-24
- (27) Keith S. Collins, *The Christian Science Monitor: Its History, Mission, and People*, Nebbadoon Press, 2012, p.4.
- (28) Robert Peel, *MARY BAKER EDDY*, p.248.
- (29) Erwin D. Canham, *Commitment to Freedom*, p.27.
- (30) Mary Baker Eddy, *Miscellaneous Writings*, 4:12
- (31) Stephen Gottschalk, *Rolling Away The Stone*, p.390.

(おだ れいこ 本学非常勤講師)

